

英語学習アンケートから見てくる英語学習のつまずき (1)

ベネッセおよび GMO の英語学習調査結果からわかること

藤本 幸伸・小川 弘敏^{*1}

English Learning Difficulties identified through the questionnaires for high school students (1)

FUJIMOTO Yukinobu, OGAWA Hirotooshi ^{*1}

(Received March 31, 2025)

キーワード：英語イメージ、日常生活の英語使用、英語学習のつまずき

はじめに

ベネッセが 2014 年に中学生と高校生 6,294 名に、2021 年に高校 3 年生 991 人に、さらに GMO インターネットグループが 2017 年に高校生と社会人 1 万人に、それぞれ英語学習調査を行っている。最初に、これらの英語学習調査からわかる中学生や高校生の英語学習の特徴や傾向を確認しておく。また、筆者二人は、令和 5 年度山口県英語教育改善プラン推進事業の一つとして山口県立萩高等学校探究科 1 年生に前期と後期の 2 回英語学習調査を行った。萩高等学校探究科生徒を対象とした英語学習調査の母数は 40 名で小さいが、ベネッセや GMO インターネットグループの英語学習調査と同傾向の結果を示していることから、探究科 1 年生を対象とした調査結果も高校生の英語学習の実態を有意的に反映していると考えている。

ベネッセや GMO は「改めて英語の指導と学習の課題を明らかにすることを目的」として英語学習調査を行ったと言っている。だが、今回の萩高等学校の英語学習調査がベネッセや GMO の調査と同じ傾向を示していることは、過去の英語学習調査に基づいた学習指導が中高生の英語学習のつまずきを解消するほどには効果的ではなかったことを意味しているのではないか。これらの英語学習調査の質問項目では、高校生が英語音声のどの箇所に聞き取りにくさを感じているのか、英文を読むのに困難を感じているのは英語のチャンクが揃っていないからなのかなど、高校生の英語学習のつまずきを特定するには至っていない。それゆえに、授業の中で生徒の英語学習のつまずきを解消する学習指導にどのような方法や教材が考えられるかのヒントは得られにくかったのではないか。今回の萩高等学校の英語学習調査では、ベネッセや GMO のアンケート項目を参照しつつ、アンケート項目を工夫してよりきめ細やかに高校生の英語学習のつまずきを特定することを目的とした。この工夫により、高校生がどこで英語学習につまずくのかを特定でき、また、高校生の英語学習のつまずきに対して、どのような学習指導が有効となるのかを工夫し試行するヒントを提供できると思われる。

まず、ベネッセや GMO の英語学習調査のアンケート項目の特徴について説明した後、2 回の英語学習調査から見てきた高校生の英語学習のつまずきを特定し、また、新たに分かってきた課題について論じていくことにする。

1. 2014 年ベネッセ英語学習調査のアンケート結果

2014 年にベネッセが行った英語学習調査は、1) 中学校入学前の英語学習、2) 現在の英語学習、3) 英語学習に対する意識、4) 英語に関する意識や関わりの 4 つの観点から、中高生の英語学習調査を行っている。2014 年の調査時に高校 1 年生から高校 3 年生は、2002 年から始まった「総合的な学習の時間」で小学校段階で英語に触れ、中学 1 年生から中学 3 年生は 2008 年からの移行措置期間で小学校「外国語活動」の中で

^{*1} 山口県立萩高等学校

英語を学習している（「外国語活動」は2011年から完全実施）。現在は、小学校5年生6年生に教科としての英語が2018年からの移行期間を経て2020年から実施され、この実施に伴い小学校3年4年から「外国語活動」で英語学習が始まり、2014年時点の中高校生は小学校の段階で英語に触れる機会を持っている。

1-1 英語授業外の学習

このような英語学習状況から推測されるように、現在の中高校生は、小学校での英語学習の機会が一番少ない高校3年生でも72.3%、中学1年生から3年生は97.0~92.5%と、中学入学前から英語を学習する経験を持っている。また、小学校での英語学習によって77.6~67.5%の中高校生が外国や英語に興味を持つようになり、70.7~50.5%が英語を聞くことは役立ったと回答している。英語に触れる機会を学校の授業以外でも持つと回答した生徒は、中学生で平均44.5%、高校生で平均41.6%と4割を超える。学校の授業外の英語学習は、英会話教室（平均50~57%）や学習塾（平均35~38）を利用する生徒が多く、2014年時点ではインターネット教材の利用は2~4%にとどまっている（ベネッセの学習調査から3年後に行ったGMOの学習調査では、英語学習アプリの利用は15.6%と増えており、英語学習方法が変化してきていることが窺える）。そして、学校外での英語学習でも、総じて「役に立っている」感が高く、中高校生の81~87%が外国や英語の興味を持つことができた、75~86%が英語を聞くことができたと回答している。だが、英語を読むこと書くことの役立ち感は、それぞれ66~82%と62~77%で英語への興味や聞き取り効果に比べ10~20ポイント低くなっており、教員生徒ともに英語授業への期待に偏りがあることが窺える。英語を仕事で使うとなると、大量の英文を読んだり、要件を誤解のない表現で簡潔に書いたりすることが求められる。生徒の英語授業への期待感や役立ち感と仕事での英語使用の実態とにズレがあることが読み取れよう。

小学校での外国語活動や教科としての英語授業の導入、英語授業の言語活動の高度化など英語コミュニケーション能力を養成するカリキュラムが組まれて英語学習環境は充実してきていることが、英語学習の「役に立っている」感に現れていると考えてよいだろう。その一方で、授業外での英語学習を半数以上の中高校生が行っていない。学校での英語学習時間でしか英語に触れず、学校外で英語学習する機会のない生徒が、中学生は平均54%、高校生は平均56.6%いる。このような授業外で英語学習を「していなかった」と回答した54~56.6%の中高校生は、そもそも英語の授業を理解できていない可能性が高いのではないだろうか。

1-2 現在の英語学習

「学校の英語の授業をどれくらい理解していますか」の問いに対して、ほとんどあるいは70%はわかっていると回答する生徒は、中学生で64%、高校生は51.3%いる。英語授業を理解できている生徒に対して、30%くらいあるいはほとんどわかっていると回答する生徒は、中学生で11.7%、高校生で13.8%いる。上記の学校外で英語学習をしていない平均54%の中学生と平均56.6%の高校生の一部が、このわからない層に相当すると言える。英語の授業を理解できていない生徒が一定数いることは、「学校の英語の授業をどれくらい理解していますか」という問いで明らかになるが、英語のどこにつまずきを感じているのか、英語授業のどのような活動がわかりやすいのかについては、アンケートの問い方を工夫する必要があるだろう。

また、「学校の英語の授業の中で、次のどのようなことをどれくらいしていましたか」という問いでは、「英文を日本語に訳す」を回答した中高生は90~86%と高い数値を示し、英語授業のほとんどをこの活動が占めている。「単語や英文を読んだり書いたりして覚える」は中学生では90~85%と高い水準だが高校に入ると75.9%まで下がる。「単語の意味や英文のしくみについて先生の説明を聞く」は中学校2年生で87.2%と最も高く、高校に入ると80%から76.6%に低くなっている。「文法問題を解く」は中高を通じて約80%と変わらない。また、「自分の気持ちや考えを英語で書く」は中学校2年生で58.1%と最も高くなるが、高校に入ると42.3%、36.3%、34.8%と英語授業の3割強にまで低下する。「自分の気持ちや考えを英語で話す」もほぼ同じ傾向で、高校では1年生の38.7%が3年生では26.3%にまで下がる。このように見てくると、中高の英語授業は生徒にとって受動的活動が多くを占めていることが窺えるが、後に見る中高生の「英語を話せたらカッコいい」、「英語ができると就職に役立つ」や「英語ができるといい高校や大学に入りやすい」といった英語へのイメージや期待が、「単語の意味や英文のしくみについて先生の説明を聞く」や「文法問題を解く」という受動的活動を促している可能性があり、教員側もより実践的な生徒主体の授業の組み立てに苦慮していることが窺える。

2013年から高校で実施されることになる「授業は英語で」と関連した問い「英語の授業で、日本人の先生

はどれくらい英語を使って授業を進めていますか」では、教師の英語使用割合（ほとんど、70%くらい、50%くらい使っているの合算）は、中学1年生で67.3%、中学2年生59.9%、中学3年生58.2%、高校1年生60.3%、高校2年生49.9%、高校3年生49.1%と、学年が進むにつれて教師の英語使用割合は低くなる。特に、大学入試が本格化する高校2年生と3年生では、教員の英語使用がほとんどない割合は、中学1年生の5.8%と比べ、15.0%と15.7%と顕著に高い傾向が見受けられる。現在では、教員が英語授業を英語で行うことは、相当定着してきているので、この低い数値は参考程度でしかないが、大学入試への対応を教員が迫られるようになると授業での英語使用は低下すると考えてよいだろう。

「あなたは現在、家ではどのような英語の勉強をしていますか」という問いに対し、中学生の80.9%と高校生の70.0%が学校の宿題・予習・復習を行うという回答で同じ傾向を示しているが、塾や英会話教室などの宿題・予習・復習をするでは中学生が44.8%であるのに対し、高校生は18.2%しかない。高校生の場合、部活動などで塾や英会話教室に通う時間がないことが影響しているのだろう。これは、宿題・予習・復習などは何もしていないと回答する中学生が9.0%と低い数値であるのに対し、高校生は21.6%と2倍強の差があることにも現れている。特に、高校生の場合、何もしない割合は1年生の17.5%が3年生では28.4%にまで高くなる。高校への進学率が98.8%（令和2年時点）でほとんどの中学生が高校に進学するために英語学習を継続するのに対して、高校生の大学進学率は54.4%（令和2年時点）と、高校生の半分強しか大学に進学しないことから、何もしない28.4%は大学進学しない高校生と考えられる。

更に、「あなたは現在、学校以外の塾や習い事で、次のような英語の勉強をしていますか」という問いでは、学習塾と回答する中学生は40.2%から約14ポイント増の53.7%になる。100%に近い中学生が高校に進学を目指して英語学習を継続するので、学校以外で英語の勉強を何もしない中学生が49.7%から9ポイント減の38.9%に低下するのは当然と言えよう。これに対し、学習塾で英語学習を行う高校生は、16.0%から24.3%へ8ポイント増える。この8%は、学校以外で英語の勉強を何もしない高校生が79.2%から71.6%へ低下する7ポイントに相当する。大学進学のために英語学習を学校内外で継続し、大学進学を目指さない高校生は家でも塾等でも英語の勉強は行わないというという実態が反映した結果だろう。だが、高校生が学校内外で英語の勉強を継続しない割合は、大学進学しないことだけに還元できない。中学校の英語学習に比べ、語彙数の増加や意味の抽象度、仮定法と比較の組み合わせなど文法項目の複雑化、1,000語近い英文量など、高校での英語学習はその量と質が複雑化することも関係している。大学進学しない高校生を除いた家でも塾等でも英語の勉強をしない層は、英語学習につまずいている層と考えられる。この層が英語学習で抱えているつまずきを特定し、そのつまずきを解消する英語の指導の方向性がわかれば、生徒の英語学習の質を高めることに繋がっていくはずだ。

「あなたはふだん、学校の英語の授業のためにどのような勉強をしていますか」という問いは、予習、復習、していないの3つの学習段階に分けられており、中学校と高校の違いや学習段階の特徴が見えてくる。ベネッセは学校の英語の授業のための勉強として、1) 単語練習、2) 単語の意味を調べる、3) 問題を解く、4) 教科書本文をノートに写す、5) 教科書本文を和訳する、6) 教科書本文を音読する、7) 教科書本文やキーセンテンスを覚える、8) 授業の内容に関連したことを調べる、9) スピーチやプレゼンテーションなどの発表の練習をする、10) 英語で意見や感想を書く、の10の項目を挙げており、この10の項目は、予習に向くものの、復習に向くもの、あるいは発展学習に相当するものに分類できるので、生徒の英語学習の特徴を洗い出すことを目的としていると考えられる。例えば、2) 単語の意味を調べる、4) 教科書本文をノートに写すや5) 教科書本文を和訳するの活動は主に予習を想定しているのに対し、1) 単語練習、3) 問題を解く、6) 教科書本文を音読するや7) 教科書本文やキーセンテンスを覚えるの活動は復習として期待する項目だろう。また、8) 授業の内容に関連したことを調べる、9) スピーチやプレゼンテーションなどの発表の練習をするや10) 英語で意見や感想を書くは、教科書が扱っている防災・平和やAIなどについて、文法問題や読解問題を解いたりする英語の技術的学習を超えた汎用的論理的思考能力や検索能力を前提とした発展学習に結びつく。さらに、中高生が、予習や復習でどの項目に焦点を置いているかによって、中高生の英語に対するイメージや学習姿勢も見えてくるだろう。

予習では、中高生とも、2) 単語の意味を調べる、4) 教科書本文をノートに写す、5) 教科書本文を和訳するの割合が高く、中学生と高校生それぞれ2) は55.5%と62.1%、4) は47.0%と32.7%、5) は34.3%と44.1%と、2位と3位が異なるが中高生は同じ予習のあり方を示している。2) 単語の意味を調べると回答する高校生の62.1%という数値は、高校では語彙量や抽象度が上がっていることを考えると、決して高い数値

とは言えないだろう。おそらく、最近はスマホで簡単に単語の意味を調べられるようになっているし、教員が新出語彙の意味を示してもするので、かえって単語の意味を調べなくなっているのではないかと。4) 教科書本文をノートに写すは、さすがに高校での数値は 32.7%と低くなっているが、中学校では 47.0%と依然高い数値にとどまっている。日本語とは異なる英語のスペリングや英語を文単位で意識させるという意味では、中学校の低学年では必要な作業と思われるが、この作業が自動化するとその効果が薄れることにも配慮がいるだろう（現に大学生でもミススペルは多いし、動詞のない英文を書きもする）。5) 教科書本文を和訳するでは、中学英語では単語の長さ（最近では evacuation など抽象的で長い語もある）や文構造の複雑さが高くなく和訳せずとも理解できるので和訳率も 34.3%と低いと、語彙レベルが上がり文構造も複雑化し長くなる高校英語では、44.1%と和訳率が高くなっている。抽象的な英文を和訳して理解しやすくすること自体は悪いことではないが、簡単な文までも和訳しないとわかった気がしないという和訳依存症には注意が必要だ。予習で和訳を指示する場合は、一読してわかりにくいと思われる箇所や文構造理解の確認に使える箇所に限定することで、生徒の予習時間を効率化できるだろうし、また和訳の効果も期待できるだろう。

復習でも中高生は同じ傾向を示し、1) 単語練習、3) 問題を解くと 7) 教科書本文やキーセンテンスを覚えるが上位を占める。1) 単語練習は、予習では 30.1%と 27.8%なのが 65.4%と 48.4%と 2 倍強と 1.5 倍強に増え、3) 問題を解くも、予習では 24.3%と 31.3%が 66.5%と 47.0%に増える。このような高い数値になるのは、単語学習と問題演習が宿題として課されるからであろう。7) 教科書本文やキーセンテンスを覚えるも同じように、予習では 14.4%と 13.7%が 3 倍弱の 39.9%と 41.3%にまで伸びる。授業中に、教員がキーセンテンスを使って文法項目を説明したり、本文の重要箇所を指摘しながら本文内容を説明するので、復習でキーセンテンスや重要箇所を覚えるようになるのであろう。

ところで、生徒の予習と復習で顕著な特徴が見られる。一つは 5) 教科書本文を和訳する、もう一つは 6) 教科書本文を音読するである。教科書本文の和訳は、予習の段階の 34.3%と 44.1%という数値が、復習でも維持され 39.6%と 30.6%の数値を示している。更に予習でも復習でも和訳しないのは 32.1%と 31.3%あり、予習・復習・なにもしないが数値的に拮抗している。このような数値の現れ方から、残念ながら、和訳することの意味を、教員も生徒も理解していないのではないと思われる。例えば、Good morning. は和訳を解するまでもなく理解できる。このような英語表現の和訳は不要だ。I love you. も「私はあなたを愛します」より「好いとうと」や「好きやき」のほうが実感を伴った和訳だと言えるが、「私はあなたを愛します」と頭の中で変換して十分理解できるのであれば、このレベルの英文も和訳は不要だ。I promised to go to the movie with my son. は、promise to do の語彙的意味「…すると約束する」がわかれば、理解に困難はない。また、Our dog showed reluctance to go for a walk in the rain. では、show reluctance to do のコロケーションがわからなければ意味理解に手間取るかもしれないが、「…したそうにない、そのような素振りを見せない」というコロケーションの意味がわかれば、この一文を訳さなくても生徒は理解できるだろう。promise to do と show reluctance to do は語彙的意味が解決できれば、一文全体を和訳させなくても生徒の理解の確認は可能だろうし、和訳させないことで英語学習時間を効率化できるだろう。だが、The storm caused a disruption in bus service. は、主語の The storm が caused 以下の動詞句で表現される事態を引き起こす原因・起因の役割をする英語独特の他動詞表現・構造の例である。この他動詞表現・構造の意味や役割を意識しながら和訳させることで英語構造の特殊性に慣れ親しむことができるだろうし、この表現に十分慣れ親しめば、自分で応用して英文作成に使うこともできるだろう。和訳は英語理解を阻害する悪者でもなければ、和訳すれば理解を確認できるといった万能策でもない。和訳を英語理解の一手段として考えて、上手に使うことが望ましいし健全である。

6) 教科書本文を音読するについて、予習でも復習でも音読しないと回答する中学生と高校生は、それぞれ 46.7%と 50.0%と非常に高い数値を示し、予習段階で音読するは 21.6%と 19.7%と低い数値だが、復習では 38.0%と 35.2%と 2 倍近い音読実践に変わる。復習段階で音読の数値が高くなるのは、授業内で教員の発音や音読、CD 音声を聴くことで、どのように発音すればよいか分かり、自分で発音できるようになるからだろう。すぐ後に取り上げるが、約 9 割の中高生が「英語が話せたらカッコいい」と回答することからも、中高生は新出語彙の発音がわからない、発音に自信がなくて発音しないのであって、英単語や英文を発音（音声化）することが嫌いというわけではない。この問いから推測できることはここまでで、中高生が教科書本文を音読するのにどのようなことがわかれば自分で発音できると考えているのかについて、更に詳しくアンケート項目を検討する必要があるだろう。

高校の教科書では新出語彙には発音記号がついている。発音記号を見ればある程度の発音はわかるとはいえ、新出語彙の発音がわからなく音読できない生徒に、[æ][dʒ] や [kw] を見れば発音できるはずと言うのは酷であるし、elephant の ph のように 2 文字がなぜ [f] の一音で表されているのかも不思議に思うだろう。発音記号を見れば発音できるはずという考えが通用するのは、英語が好きで得意で自ら調べて発音記号を知っている英語学力上位者だけだ。その英語学力上位者でも、文単位のアクセント、リズムやイントネーション、あるいはチャンクの区切りとイントネーション、さらに、連結、同化や脱落といった音変化についてはつまづきを感じているにちがいない。そうでなければ、次の 1-3 英語学習に対する意識で、「英語を聞き取るのが難しい」で高校生の 70.9% という高い数値は現れないだろう。英語の発音や音読に関して生徒が英語音声のどのような現象につまづきを感じているかを特定するアンケート項目を検討する必要があると言えそうだ。

また、圧倒的に予習でも復習もしないと回答する項目は、8) 授業の内容に関連したことを調べる、9) スピーチやプレゼンテーションなどの発表の練習をするや 10) 英語で意見や感想を書くである。これらは、仕事で英語を使う場面で最も必要とされる項目であるが、中学生と高校生それぞれ、8) は 71.5% と 74.3%、9) は 73.2% と 82.6%、10) は 78.2% と 84.1% と、論理的思考能力や検索能力を活用する英語学習はほとんど行っていない。国語や現代社会では、論理的思考能力や検索能力を活用して、あるテーマに関連する事柄を調べプレゼンテーションやレポート作成を行っていることを考えれば、英語でこの能力が使えないというわけではないだろう。大学入試など英語の試験でこのような能力を活用する必要がないために、英語を主体的に活用することが少ないと考えられる。

1-3 英語学習に対する意識

生徒の英語学習への意識を「あなたは英語が得意ですか、苦手ですか」「あなたが、英語を苦手と感じるようになったのはいつですか」「英語の学習にかかわることについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか」の問いで確認している。

英語の得意・苦手意識について、とても得意・やや得意と回答する中学生は 55.6% であるのに対し、高校生では 45.6% と 5 割を切っている。高校では、とても苦手・やや苦手は 53.8% で、得意を 8 ポイントも上回っている。高校生は英語を苦手とする生徒が多いと思えるのだが、この得意・苦手に関する数値は、英語を苦手と感じるようになる時期と関連させると、また違った読み取りが可能になる。

英語を苦手と感じる時期は、中学 1 年生後半から中学 2 年後半の期間と高校 1 年前半の 2 回ピークを迎えるというのがベネッセの分析だが、これには若干の留保が必要だろう。中学時代の英語苦手意識は、アンケート実施時期に高校 1 年生と 2 年生が高く、それぞれ 16.0% と 17.5% だが、高校 3 年生では同時期に英語が苦手になったと回答したのは 11.7% に下がる。英語学習で苦労した思い出がまだ残っている時期に高い数値が出ている。また、次の英語苦手ピークの高校 1 年前半は、現に英語学習で苦労している高校 1 年生が高く 15.4%、高校 2 年生では 9.9%、高校 3 年生は 12.3% になる。英語を苦手だと回答する数値は、英語を苦手と感じた時期に近い学年が高くなる傾向にあるという当たり前の事実を忘れてはならない。

これよりも注目すべきは、英語を苦手と感じる数値が下がる時期だ。中学では高校入試を迎える中学 3 年前半と後半に、高校入試を終えたばかりの高校 1 年生では 6.3% から 3.4% に半減する。次の英語苦手下降期は大学入試を迎える高校 2 年後半から高校 3 年後半で、大学入試の準備をしている高校 3 年生では 2.4% から 0.6% そして 0.2% まで下がる。入試直前に集中的に英語学習をすることで英語学習時間が多くなり、英語苦手意識を感じなくなっていることがわかる。上で、英語をとてとても苦手・やや苦手とする高校生は 53.8% に及ぶと指摘されているが、この数値は家庭でも英語学習をしていない 21.6% の層との関わりが大きく、英語を得意とする 45.6% は家庭学習をする 70.0% や塾などで英語学習をする 18.2% と関わっている。たしかに苦手と得意の数値と英語学習の有無の数値はきれいに重ならないが、そのズレは英語は好きだが成績が伸びない層が存在するからだろう。中高生の英語苦手時期のピークが 2 回あるという指摘に一喜一憂して拙速な対応をするよりも、この英語は好きだが成績が伸びない層が英語学習のどこにつまづきを感じているかを特定することが急務と言えらるう。

「英語の学習にかかわることについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか」の「次のようなこと」は、1) 文法が難しい、2) 英語の文を書くのが難しい、3) 英語を聞き取るのが難しい、4) 単語を覚えるのが難しい、5) 英語のテストで思うような点数が取れない、6) 英語を話すのが難しい、7) 英語に限らず自分から進んで勉強する習慣がない、8) 英語に限らず勉強する気持ちがわからない、9) 英語の文を音読す

るのが難しい、10) 毎週ある英語のテストのための勉強が大変、11) 外国・異文化に興味を持てない、12) 英語そのものが嫌い、が挙げられている。

高校生にとって難しいが7割を超える項目、1) 文法が難しい (79.2%)、2) 英語の文を書くのが難しい (77.5%)、6) 英語を話すのが難しい (72.9%)、3) 英語を聞き取るのが難しい (70.9%) について、ベネッセは中学と高校で10ポイント以上の差がある項目に注目するが、ここでは音声と活字の観点から検討しておく。音声面で注目すべきは、英語を話す聞き取るのが難しいと回答するが、9) 英語の文を音読するのが難しいは44.3%で、話す聞くに比べ26~28ポイントも数値が低く音読への関心が薄い。だがこの差は、英語文の音読は教員の指導によってその数値は上昇する事実を思い出せば、授業内で教員による音読指導が少ないために音読への関心が低いと言えるのではないか。約9割の中高生が「英語が話せたらカッコいい」と思っているのだが、自分から英語を発音することが少ない、よって英語が口をついて出ず、英語を話すのが難しいと感じるのであろう。教員による音読指導の導入によって、英語を話したり聞いたりすることに感じる生徒の難しさは低減するはずだ。

高校生が最も難しいと回答するのが、1) 文法が難しいと2) 英語の文を書くのが難しいであるが、高校生が挙げる文法の難しさとはなんだろうか。文法の難しさと英語文を書く難しさに関連させるとき、高校生の言う文法の難しさは文法知識を書くことに関連させることができないことから生まれているのではないかという疑問が生まれる。例えば、「気候変動対策と経済発展を両立させることは難しい」を英語で書く場合、「気候変動対策 (climate change measures)」や「両立する (balance A and B)」は語彙の問題だが、「…するのは難しい」の It is difficult to do は文法に属する。文法ではこの It is difficult to do は不定詞の目的語の繰り上げ用法もしくは形式主語 it の用法の箇所で、書き換え練習や be willing to do などと区別する練習に組み込まれる。だが、英語文を書く場合、この It is difficult to do は不定詞の繰り上げ用法や形式主語の用法がわかっているかどうかよりも、中田達也が『英語は決まり文句が8割』などで指摘しているように、It is difficult to do を定型表現としていつでも活用できるようにしておくことのほうが重要になる。英語辞典でも、この It is difficult to do はコロケーションとして太字で印字され、英語による発信に注意させる用例提示をしている。更に言えば、文法は「知覚動詞+目的語+原形」と「知覚動詞+目的語+ing形」との意味の区別を熱心に行うが、この区別が理解できていなくても英文内容理解に影響はない。知覚動詞の後の原形か ing 形かの区別は英文読解には非関与的だし、英文を書く場合もこの区別を理解していなければ英文が書けないわけでもない。むしろ大学入試レベルの英文には動詞の名詞形で構成される名詞句チャンクが頻繁に現れ、この名詞句チャンクの読み解き方に高校生は困難を覚える。だが、動詞の名詞形の読み解き方は文法項目の中に入っていないため、そもそも解説されることもない。現在の文法は英文を読んだり書いたりことに繋がっていない、高校生が英文を読んだり書いたりする際に学習した文法知識をどのように活用すればいいのかの指針を示していないところに、高校生は文法が難しいと感じている。

ベネッセは高校生の英語学習のつまづきを特定するために、7) 英語に限らず自分から進んで勉強する習慣がないと8) 英語に限らず勉強する気持ちがわからないという項目を差し込み、高校生の勉強する習慣と気持ちの有無を調べようとする。いずれの項目も高校生の方が若干高く、7) は51.0%、8) は42.2%とかなり高い数値になっている。これは、12) 英語そのものが嫌いの37.3%と組み合わせると、高校生の一定層はそもそも英語学習習慣がないことがわかる。だが、何度も言及するが、高校生の約9割が「英語が話せたらカッコいい」と英語への憧れを示し、大学入試の準備で英語学習時間が増えると、英語の苦手意識が下がる事実を思い返すと、英語学習習慣が無いというアンケート結果は、英語を学習したいがどのようにすれば成績が伸びる学習方法なのかがわからず困っていることを示しているのではないか。生徒の英語学習意識を調査する場合、調査対象である生徒の学力レベルの階層性にも目配せが必要だろう。高校生の約50%しか大学進学しない（だからといって、大学進学しない高校生は英語は必要もないし勉強もしなくてよいというのは言い過ぎだろう。大学進学と関係なく自分で英語学習を継続し英語を使うことができる生徒もいるからだ）。生徒の学力を、成績上位層、成績中位層、成績下位層に分けるとすれば、成績上位層は英語が好きで成績もよくかつ自ら進んで学習方法を工夫できる。成績下位層の一部は学習意欲を持たない。大切なのは、英語は好きだが成績が伸びない成績中位層で、この層が英語学習のどの箇所にどのようなつまづきを感じているのかを特定し、そのつまづきを解消する英語指導のあり方を何度も試行することだろう。英語は好きだが成績が伸びない層に、教科書を和訳させたり問題を解かせたりすることで学習意欲を導き出すのは難しいだろう。

1-4 英語に関する意識や関わり

生徒が英語にどれくらい必要性を感じているか、英語を使うことをどのようにイメージしているかを調べる問いの中で、「あなたが大人になったとき、①社会ではどれくらい英語を使う必要がある世の中になっていると思いますか。また、②あなた自身はどれくらい英語を使っていると思いますか」「あなたは将来、どれくらいの英語力を身につけたいですか」は、生徒が感じている英語の必要性和自身の英語力とにギャップがあるかを探り、「あなたと外国や英語との関わりについて、次のようなことはあてはまりますか」で生徒が日常生活でどれくらい英語を必要とする場面があるか、さらに「あなたは、以下のことについてどう思いますか」で英語に対するイメージを確認し、最後に「英語を勉強する上で大切なことは何だと思いますか」で高校入試や大学入試の制約が無くなったときどのような英語学習が望ましいと考えているかを問うている。

「あなたが大人になったとき、①社会ではどれくらい英語を使う必要がある世の中になっていると思いますか。また、②あなた自身はどれくらい英語を使っていると思いますか」では、英語を使う必要性については中高生とも、「いつもではないが仕事で英語を使うことがある」はそれぞれ 54.0%と 58.5%と高い数値だが、自分が英語を使うイメージはほとんどなく、それぞれ 44.2%と 46.4%と 5 割近い数値となっている。中高生にとって、日常的に英語を使うことが少ないために、自分が将来英語を使っている場面を想像できないのだろう。この結果は「あなたは将来、どれくらいの英語力を身につけたいですか」にも反映され、「英語で仕事ができるくらいの英語力」と回答する中高生は 21.9%と 22.0%にとどまるのに対し、「日常会話や海外旅行で困らないくらいの英語力」は 2.3 倍も多い 49.3%と 51.7%になる。日常生活で英語を使うことの少ない中高生にとって仕事に必要な英語力はそもそも想像しにくく、また、自身が使いたい英語も漠然とした日常会話や海外旅行英会話しか思い浮かばないのだろう。残念ながら、中高生にとって英語は「話せたらカッコいい」という飾りでしかない。

2013 年に武蔵野大学で大学生の英語意識調査を行った古家聡と櫻井千佳子は、「日本人大学生がコミュニケーションと言った場合には、日常の私的な会話や対話のことをイメージしている」と同様の英語イメージを大学生も持っている」と指摘する。だが、本来コミュニケーションとは「相互的な共有行動」(35)である。多くの日本人英語学習者が「Yes や No だけで、会話を終わらせていたり、“Thank you” や “I don't know.” だけで、そのあとが続いていないのに、本人は、それでコミュニケーションを取っていると勘違いしている。これでは相手とやり取りを続けたいという意図が感じられない」(36)と日本人の英語学習の向き合い方に危機感を抱いている。「英語が話せたらカッコいい」というイメージが先行し、コミュニケーションが必然的に異文化間での課題とその解決に向けた知の共有であるという観点が希薄であることは否めない。

「あなたと外国や英語との関わりについて、次のようなことはあてはまりますか」の「次のようなこと」に、1) 英語の検定試験を受けたことがある、2) 家族に英語の歌を聴く人がいる、3) 家族に英語音声の映画やテレビ番組を観る人がいる、4) 家族に英語を話せる人がいる、5) 外国の友だちがいる、6) 外国に住んでいる（または住んでいたことがある）家族や親せきがいる、7) 中学校入学後、海外旅行やホームステイ（留学なども含む）に行ったことがある、8) 中学入学後、外国に住んでいたことがある、9) どれにもあてはまらない、が挙げられている。4) から 8) は、4) の中学生 (22.6%) を除いて、7.0%~14.2%と低い数値で、自身を含めて日常的に英語や外国文化に出会う場面がないことが窺える。2) と 3) は、家族を介して英語音声に触れる受動的機会は、中高生それぞれで、39.0%と 34.4%、26.3%と 25.3%で、一部の中高生は受動的に英語音声に触れてることがわかる。やはり圧倒的に多いのが、1) の検定試験で、それぞれ 41.8%と 57.5%で高い数値を示している。日常的に英語や外国文化に家族を通して触れる機会や家庭内に英語音声が流れている環境のある中高生は 3 割前後しかおらず、約 5 割の中高生にとって英語に触れる機会は英語の試験の場だけ、日常的に英語を身近に感じる機会の少なさが英語学習意欲にも反映している。

「あなたは、以下のことについてどう思いますか」で挙げられている英語イメージは、1) 英語のテストでいい点を取りたい、2) 英語が話せたらカッコいい、3) 英語ができると就職に役立つ、4) 英語ができるといい高校や大学に入りやすい、5) 外国の人と友だちになりたい、6) 外国の文化やスポーツに興味がある、7) 英語の音やリズムがおもしろい、8) 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックでは英語で外国の人を「おもてなし」したい、9) 世界で活躍できる人になりたい、10) 日本の文化を外国の人に紹介したい、11) 英語を使って仕事をしたい、12) 英語の文のつくりやしくみがおもしろい、13) 外国の高校や大学に留学したいであるが、やはり英語や外国文化との接触の少なさの影響が見て取れる。英語イメージ 2) 英語が話せたらカッコいいは、中高生それぞれ 88.5%と 90.5%で、英語学習習慣のない生徒までもが英語への憧れを持つ

ていることがわかる。中でも顕著なのが進学と就職に結びつく 1) 英語のテストでいい点を取りたい (93.9%と 90.2%)、3) 英語ができると就職に役立つ (86.1%と 88.9%) と 4) 英語ができるといい高校や大学に入りやすい (84.7%と 85.6%) で、9 割前後の圧倒的高い数値である。生徒にとって英語は、商社員や外交官が英語を使ってどのような仕事をしているのかといった職種や仕事内容、言葉がどのような仕組みで成り立っているのか、言葉がどのように物語世界を生み出すのかといった言語としての専門性をイメージしにくい教科なのだろう。これが、7) 英語の音やリズムがおもしろい (48.0%と 43.6%)、11) 英語を使って仕事をしたい (36.2%と 36.0%) と 12) 英語の文のつくりやしくみがおもしろい (36.1%と 28.9%) の低い数値に反映され、進学や就職と結びつく英語イメージの 5 割にも達しないのだろう。

「英語を勉強する上で大切なことは何だと思いますか」という問いは、受験や学校のテストを離れた中高生の英語学習への期待を反映していると見ることができる。高校生に注目して数値の高い順に並べると、英語でたくさん会話をする (53.4%と 59.8%)、単語をたくさん覚える (46.5%と 56.4%)、英語をたくさん聞く (37.4%と 46.1%) といった発信の項目に集中する。同じく英語による発信に関わる発音をきれいにする (29.1%と 22.3%) は 3 割弱で、日常的に英語で発信することを行っていれば、英語発音にもっと関心があってもよいはずだ。英語の専門性に関わる文法の知識を増やす (38.2%と 35.68%) も低くはないが高くもなく、また、仕事で英語を使うことに結びつくはずの自分の意見や考えを英語でたくさん書く (26.0%と 26.0%) や英語をたくさん読む (20.0%と 24.6%) も 3 割に届かない数値で、専門性や職種をイメージしにくい英語教科の特徴が現れている。受験やテストを連想させる問題をたくさん解く (18.0%と 12.3%)、英語のテストでいい成績をとる (16.5%と 7.4%)、英文を一文一文日本語に訳す (10.2%と 6.7%) は、中高生にとって必要悪とみなされているのだろう、非常に低い数値だ。

ここまでベネッセが行った英語学習調査の結果をコメントを挟みつつ詳しく見てきた。この調査からわかる中高生の英語へのイメージや期待は、「英語が話せたらカッコいい」に集約される。英語学習習慣のない生徒までも英語を話すことに強い憧れを持っている。多くの英語学習アンケートで繰り返し強調され英語教育批判に使われる生徒の英語苦手意識は英語の学習時間が多くなれば解消されることが多く、世間の英語教育批判と生徒の実際は異なることを指摘した。英語教科の特性として「話せたらカッコいい」イメージが先行し、英語を使う職種や言語としての英語の専門性といった上級者用の学習に結びつきにくいこともはっきりした。特に、英語学習アンケートが英語の成績中位層のつまずきを特定するに至らず、よって英語学習のつまずきを解消する指導のあり方を示し得ていないことを指摘した。この成績中位層のつまずきを特定するアンケート項目の検討が必要だろう。

2. 2022 年ベネッセと 2017 年 GMO の英語学習調査のアンケート結果

2022 年にベネッセはほぼ同じ生徒を対象にした継続調査の結果を発表している。また、2020 年から始まる小学校英語を機に関心が高まっている英語教育について、GMO が 2017 年に 15 歳から 19 歳の未成年と 20 歳から 59 歳までの成人を対象とした英語意識調査を行っている。2014 年のベネッセによる英語学習調査の結果を詳しく論じているので、以下では、新しく加わったアンケート項目を中心に検討していく。

2-1 2022 年ベネッセ継続調査

この継続調査のアンケート項目は、1) 授業時間数、2) 英語の授業でしていたこと、3) 英語の授業の好き嫌い、4) 意欲・動機づけ・言語観、5) 英語や外国に関わる経験のうちもっとも印象に残っている経験である。この内 2)、3) と 4) を見ておきたい。

2) 英語の授業でしていたことに挙げられている項目によくしていたと回答した数値を加えておく。a) 英文を日本語の訳す (49.4%)、b) 文法の問題を解く (40.6%)、c) 単語の意味や英文のしくみについて先生の説明を聞く (41.4%)、d) 単語や英文を読んだり書いたりして覚える (36.6%)、e) 教科書本文以外の初めて見る文章を読む (33.1%)、f) 教科書本文以外の英語の音声や先生や友だちが英語で話すのを聞く (29.0%)、g) 自分の気持ちや考えを英語で書く (20.3%)、h) 自分の気持ちや考えを英語で話す (16.8%)。a) から d) は 2014 年度共通する項目、e) は大学入試の準備、f) から h) は生徒の英語による主体的発信に相当する。授業では日本語に訳すや問題を解くなど受動的活動が中心ですることは変わらない。大学入試を控え教科書本文以外の初めて見る文章を読むが高校 3 年になると急激に上昇し、それに伴い主体的活動は元々低い数値から一層低下

する。

3) の英語の好き嫌いと得意苦手は、2014 年の調査と同傾向だが、注目すべきは好き苦手の割合は中学 1 年の 11.5%から高校 3 年の 17.1%まで一定数存在すること、嫌い苦手が中学 1 年の 17.1%から高校 1 年 36.6%、高校 3 年の 40.7%と急激に上昇することだ。上で解説したように、この「苦手」は 4) の項目である「英語を使う力を高める学習方法がわからない」と関連する。

「英語がわかったり通じたりするとうれしい」（とてもあてはまる + まああてはまるの合算 89.0%）と「教室の外で英語を使ってみよう」（66.3%）の高い数値は、好き苦手（17.1%）と嫌い苦手（40.7%）の合計 57.8%とは矛盾するように見えるが、「英語が話せたらカッコいい」イメージを反映していると考えられる。また、「高校までの授業で英語を使う力を高められた」と「これからも英語を頑張って勉強したい」の 64.0%と 61.7%は、高校 3 年時での英語が好きで得意層の数値 38.5%とはかけ離れている。だが、38.5%に好きだが苦手層の 17.1%を加えると 55.6%になり、64.0%と 61.7%に近づく。また、「英語を使う力を高める学習方法がわからない」は 61.0%で、英語力を高められた（64.0%）と英語を勉強したい（61.7%）と拮抗している。さらに、授業で話す書く活動の有無によって「高校までの授業で英語を使う力を高められた」と「これからも英語を頑張って勉強したい」の数値に開きがあるのと比べて（有と無いそれぞれ 76.0%と 48.9%、74.9%と 47.9%）、「英語を使う力を高める学習方法がわからない」は、授業で話す書く活動の有無と関係なく 62.0%と 62.5%という高い数値である。授業で英語を主体的に使ってきた生徒の英語授業の満足度や学習意欲が高いのは当然だが、そうであるからこそ英語学習の方法がわからないとする 62%前後の数値は、英語は好きだが苦手層の英語学習のつまずきが大きく関わっていると言える。

「英語を使う力を高める学習方法がわからない」が高い数値であることについて、ベネッセ教育総合研究所の継続調査メンバーの一人である工藤洋路（2021）は、「授業の中で言語活動が増えて、様々なことを行っているから、どれが能力向上に貢献するのか、選択肢があり過ぎて分からないのかもしれない。これは、授業を行う面では悪いことではないと考えます。いろいろなことを経験し、多様な教材に触れ、いろいろなステップを踏むことで、どれを使えば自分の英語力向上につながるのかが分からなくなるかもしれませんが、もう少し成長すると分かるようになる、とポジティブに捉えてもよいのかなと思います」（11-12）と分析しているが、英語が好きだが苦手という生徒は「もう少し成長すると分かるようになる」と悠長な気持ちにはなれないだろう。英語は好きだが苦手層の英語学習のつまずきを特定しそのつまずきを解消する指導法を検討するためにもアンケート項目の検討が必要だろう。

2-2 2017 年 GMO の英語学習調査

GMO は未成年（15～19 歳）と成人（20～59 歳）の 1 万人を対象に、1) 英語に対する意識（得意苦手意識、苦手意識の時期、苦手の理由）、2) 英語のスキル・勉強方法、3) 英語に触れている時間・活かしている場面、4) 英語を習得することの重要性の項目に関する英語意識調査を行っている。

英語の苦手意識は未成年（62.4%）・成人（67.0%）とも 6 割超える数値で、ベネッセの継続調査（高校 3 年）のやや苦手とても苦手の 57.7%とほぼ同じ傾向を示し、苦手意識を持ち始めた時期も高校 1 年と同じである。そして、英語を苦手とする理由は「英語を使う機会がない」（未成年 69.6%、成人 89.5%）が最も多く、日常生活で英語を使う場面の少なさが改めて確認される。また成人では聞き取りや英語発音の難しさをあげるが、未成年は語彙や文法に加え、「英文を読み解くことが難しい」が 50.4%もいる。この数値は、得意な英語スキルとして未成年成人ともに挙げる「リスニング」（34.1%と 31.7%）と「リーディング」（32.2%と 30.8%）の数値と矛盾しているように思える。リーディングに関しては、文章が読解できていることとテストで点数がとれることと乖離していることから、得意だが読み解けないという事態になっているのではないだろうか。また、iPhone が日本で販売された 2007 年から 10 年が経過する 2017 年ではスマートフォンやタブレット端末が普及し、英語学習の方法に「英語学習アプリを利用」が加わり、特に未成年では 15.6%が活用している。最近では AI の急速な普及で高校生は授業で ChatGPT や DeepL 翻訳を使うようだ。

英語の学習時間は従来と変わらない傾向を示し、英語活用の場面は未成年が「海外旅行」（42.9%）を挙げるのに対し、成人は「特になし」が 55.5%という結果で、「英語が話せたらカッコいい」イメージと日常生活での英語活用の少なさが改めて浮き彫りになっている。この英語活用の少なさは相当深刻で、英語習得は重要かという問いに対して未成年は 82.9%がとてもそう思う・ややそう思うと回答するのにに対し、成人は 50.2%にとどまる（とてもそう思うは 17.7%と低い）。「英語が話せたらカッコいい」イメージと日常生

活での英語使用の少なさが英語学習意識に与える影響の大きさが確認できる。

おわりに

ベネッセと GMO の英語学習調査の結果から、中高生は英語に対して「英語が話せたらカッコいい」イメージを強く持っていることが改めて確認できる。ベネッセやその他の調査は中高生の英語苦手時期に注目するが、英語苦手意識が弱まる時期に注目すると苦手意識に別の見方ができる。中高生は受験直前になると英語学習時間が増え、それまでの英語苦手意識が弱まるのだ。そして、この英語学習時間の少なさと苦手意識は日常での英語使用機会の少なさと苦手意識は相関関係にあることもわかった。また、「英語が話せたらカッコいい」という憧れを強く持ちながら、英語を聞くことや話すことへの苦手意識を持ちながら、しかし自分で英語を発音することには無頓着であるという英語学習のちぐはぐさも明らかになった。

だが、ベネッセや GMO の英語学習調査項目ではなかなか見えてこないのが、英語は好きだが成績が伸びず苦手意識を持つ層の存在であった。英語学習調査の数値を色々な角度から見ていくことで、英語は好きだが苦手層が一定数存在することを示すことができた。また、英語を話したいが自分から発音することはしないという齟齬の起因は、授業で英語発音の指導が少ないことにある。

このような英語学習調査結果の分析と、筆者（小川）の観察による生徒の学習実態（単語を調べない、英語チャンクの理解不足、準備した英文を丸覚えする reproduction や retelling 活動、授業中の翻訳アプリ利用など）を基に、英語学習アンケートの項目を検討しなおし、探究科 1 年生にアンケートを行った。アンケート結果から、生徒は同化・脱落・連結といった英語音声の変化に困難を感じていることや 600～900 語の長さの英文を読むことの難しさや一文一文はわかっても英文全体が何を言おうとしているのかの理解になると自信が持てないなどを明らかにすることができた。そして、英語は好きだが苦手という層をターゲットとした指導方法を検討してきている。次回、萩高等学校でのアンケートとその分析、分析を基にした指導の試行錯誤について検討していく予定である。

付記

本論文で行った英語学習アンケートの分析に基づき、小川が萩高等学校で行う英語学習アンケートを作成し、「おわりに」を分担した。

参考文献

- イー・ラーニング研究所（2025）：「日本の英語教育」についての意識調査
（<https://kyodonewsprwire.jp/release/202412272354> 最終閲覧日：2025 年 3 月 24 日）
- GMO リサーチ（2017）：英語に関する意識調査
（<https://www.gmo.jp/news/article/5792/> 最終閲覧日：2025 年 3 月 24 日）
- 古家聡、櫻井千佳子（2014） 英語に関する大学生の意識調査と英語コミュニケーション能力育成について
の一考察 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis Vol. 4
（CV_20250324_04_The_Basis_Vol4.pdf 最終閲覧日：2025 年 3 月 24 日）
- 中田達也、鈴木祐一、濱田陽（2022） 英語学習の科学 研究社
- 中田達也（2022） 英語は決まり文句が 8 割 今日から役立つ「定型表現」活用法 講談社新書
- 中田達也（2023） 最新の第二言語習得研究に基づく究極の英語学習法 KADOKAWA
- ベネッセ教育総合研究所（2014） 速報版 中高生の英語学習に関する実態調査 2014
（Teenagers_English_learning_Survey-2014_ALL.pdf 最終閲覧日：2025 年 3 月 24 日）
- ベネッセ教育総合研究所（2015） 子どもたちの未来を豊かにする英語教育とは？—「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」から考える課題と指導実践のあり方—
（report_2014.pdf 最終閲覧日：2025 年 3 月 24 日）
- ベネッセ教育総合研究所（2021） 英語を使いたい、学びたいという意欲を高める英語教育とは— 一小 6 時から高 3 時まで 7 年間追った「英語学習に関する継続調査」をもとに考える—

(ARCLESYMP02021.pdf 最終閲覧日：2025年3月24日)
ベネッセ教育総合研究所（2022）ダイジェスト版 高3生の英語学習に関する調査＜2015-2021 継続調査＞
(https://benesse.jp/berd/up_images/research/kousaneigo2021.pdf 最終閲覧日：2025年3月24日)
ベネッセ i-キャリア（2024）「大学生の英語学習意識について」に関する調査
(https://www.benesse-i-career.co.jp/news/20240404_1release.pdf 最終閲覧日：2025年3月24日)
光村図書（2022）【アンケート結果】子どもと保護者の英語学習に関する意識調査
(<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000021.000073231.html> 最終閲覧日：2025年3月24日)